



白い彼岸花

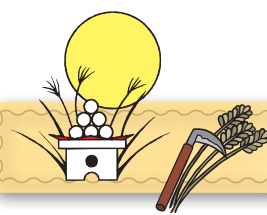
彼岸花先祖の香りただよいて 吉岡咲子

境内に咲くこの2本はある方が植えてくれたもので、どこに咲くのかはぜひご自身で見つけて欲しい。
 なか正確には不明で、色も赤と白の2説ある。
 白い花はシロバナマンジュシヤゲと言ひ、赤い彼岸花と黄色い鐘馗水仙の雑種と言われる。一方で原種のひとつとか、改良品種とか諸説あつてここでは書き切れない。お経に出てくる曼珠沙華もこの花の事なのか正確には不明で、色も赤と白の2説ある。
 私たちが墓地等で目にする彼岸花は大半が赤い。

日本では秋の彼岸に咲くから彼岸花と呼ばれるが、正式には曼珠沙華という。インドでお経の書かれた古い言葉、梵語でそのままマンジュシヤゲとなつてゐる。そこでは「天上界に咲く花で、白くて柔らかな見る者に悪を離れさせる働きがある」とか、「祝い事など慶事が起こる前ぶれに赤い花びらが天からユラユラと降ってくる」とあり、美しくも誠にありがたい花でもある。

妙の光

復刊
100号
記念号



行事案内



天野尚写真展『日本庭園の美』

9月16日(土)～10月1日(日)

◆午前10時～午後4時30分
 ※9月17日(日)・23日(土)・24日(日)は催事のため午後1時開場
 2015年に亡くなった世界的写真家・天野尚さんが撮った、ほぼ未公開の写真を妙光寺客殿で展示致します。

天野尚 3回忌追悼コンサート

10月1日(日)

◆午後2時開演 妙光寺本堂にて
 ◆入場料 前売り1,000円(当日1,300円)
 響きのよい本堂で本場のオペラの歌声をご堪能ください。
 (写真展、コンサート、詳細は別紙チラシをご覧ください。)

お彼岸中日法要

9月23日(土)祝

午前10時30分 安穩廟法要
 11時 秋季彼岸会中日法要(本堂)
 12時 おとき(当日受付)
 午後1時 住職法話
 ※どなたでも、ゆつくりお参りいただけます。

七五三詣り

11月12日(日)

◆午前 10時30分
 ◆受付 午前11時 ご祈祷
 お子さん、お孫さんの健やかな成長を願い、ご祈祷をいたします。(詳細は別紙案内をご覧ください)



ほうとうけいしょうしき

法灯継承式

11月18日(土)

妙光寺43年ぶりの住職交代の慶事です。本堂での『法灯継承式』及び、ホテル泉慶での中継祝賀会ともに、おかげさまで定員となりました。参加の皆さまには追って詳細のご案内があります。
 ※法灯継承式に合わせ、お会式(日蓮聖人第736遠忌法要)を執り行います。本年は法号授与式はお休みです。

合同法事

今年年回忌(法事)が当たっていたけれど都合でできなかったという方のために、合同の年回忌法要を営みます。檀信徒・安穩会員どなたでも。

12月10日(日) 午前 10時 受付
 10時30分 法要
 11時30分 銘々で墓参り

◆費用 ●塔婆1霊位2千円
 ●お供物共通2千円
 ●お布施

◆持物 ●位牌 ●墓参用の花、口ウソク、線香 ●平服でどうぞ
 ◆申込 12月3日までに電話でもかまいませんが、なるべくFAXやハガキ、メール等で。



月例信行会

10月1日(日)、11月5日(日)、12月3日(日)

◆毎月第1日曜日 朝7時～9時
 ◆会費 1,000円(各自さい銭箱へお願いします)
 *予約不要。当日お寺へ直接お越しください。お参り、法話、作務、朝粥の朝食とコーヒータイムがあります。

月例ボランテラ 毎月15日

◆午前9時から11時半。午後1時～3時
 主に本堂清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越しください。昼食はご持参で。

お寺でヨガ

初心者向けのヨガ体験。予約制。
 9月21日(土) 10月19日(土) 11月16日(土)
 ●14:00～15:15 ●参加費 ●1回700円
 ●持ち物 ヨガマット、もしくはバスタオル
 ●講師 ノリコさん
 どなたでも参加できますが、予約制です。その都度電話での連絡をお願いします。
 ※12月から3月まで「お寺でヨガ」はお休みします。



『妙の光』が100号を迎え、今号は増ページでお届けいたします。100号だから25年と思っていたら、数えてみると27年間でした。途中で「本堂落慶特別号」など号外も出ていますが、「今年は2回しか出せませんでした」という年もあり、苦勞が偲ばれます。継続できた最大の秘訣は、予定通り出せなくてもめげずに続けたことかもしれません。次号101号は、次の25年へのスタートです。ご協力をお願いいたします。(編集部・新倉理恵子)

妙の光 100号の軌跡 小川英爾

偶然の重なり

本誌『妙の光』が、住職交代のこのときに奇しくも復刊100号を迎えました。決して意図したところではない全くの偶然です。11月の法灯継承式の記念品に、住職在任40年をまとめた記念誌を準備中なので、今回の号は少し簡略化するつもりでした。ところがそれが100号になることが分かり逆に増ページになってしまいました。

寺は檀信徒を中心とした皆さんのものですから、少しでも親しく身近に感じて欲しい、それを一番に心掛けてきたつもりです。お釈迦様の教えと日蓮聖人の教えは、私の中でぶれなければ、直接お伝えするのは二番目でいいと考えてきました。お恥ずかしい内容でしたが継続は力なりの言葉通り、少なくとも後世への記録としては意義あるものになったと思っています。

そもそもの始まり

父である先代住職が20代後半に始めたのが3号でストップ。再開

して25号まで継続して、66歳の遷化（僧侶の死）で途絶えてしまいました。ガンの病床で原稿の修正をしていた姿がいまだにまぶたから離れません。現在の『妙の光』の標題は当時の先代の文字です。

私としてはまた途中で休むわけにいかないので、再々開はなかなか決断できませんでした。就任17年後、安穩廟が軌道に乗り檀信徒が増えていよいよ必要性に迫られました。そこで継続の負担が重くならないよう、写真を入れ、インタビュや寺の動きでページが埋まることを考え、現在の基本型が出来ました。

一番の人氣ページと言われる妻なぎさの『寺庭から』も第1号からありました。最初は遅かった筆も今では皆さんからのおだてに乗せられて？ 毎回唸っている私をしり目にさらさらと書きあがります。

近年各地の寺でこうした寺報の必要性が理解され、『妙の光』を参考にしましたと言ってくださる寺の多いことは嬉しい限りです。それでもカラーでこれほどの質とページ数を維持できたのは、編集・デ

ザイン・発送のボランティアの方々のおかげです。

ことに復刊から先ごろまで印刷を格安で担当されたアダチプリントの足立鉄三社長には大変お世話になりました。それがご縁でご夫妻は今、安穩廟に埋葬されています。2代目社長にもそのまま引き継いでいただきましたが、昨今の印刷不況と健康上の理由から廃業のやむなきに至りました。その際もしつかり信頼置ける会社を紹介いただきました。諸行無常、時の流れを痛感します。

これからの方向性

当初は白黒の小さなA5版でしたが、やや大きなB5版、そして現在の一部カラーA4版へと変わりました。いま流行の新しい通信手段による速報性も大事です。一方で記録として残る、さらには高齢者にもじっくり読めることも忘れない方がよいと思います。今後の『妙の光』は新住職の方針次第ですが、妙光寺が皆さんにとって一層身近になる工夫を続けていってほしいと願っています。

誌上法話

小川英爾



「まず臨終の事を習うて他事を習うべし」

日蓮聖人『妙法尼御前御返事』

突然の`末期がん告知、

東京のNさんは、作秋妙光寺で法事をされ、お斎の席でお酒をご一緒しました。今年1月には、ある会合でも同席させていただきました。2月には学生時代からの仲間たちと長野と岩手でスキーを楽しむ元気な82歳でした。3月に入り食欲不振で通院し、水分不足ではとポカリスエットを勧められたものの改善せず、1週間後再受診して処方されたのが胃腸薬。それほど元気だったそうです。なかなか食欲が回復しないので大学病院で検査をしたら、胃も食道も侵された末期がんで治療のすべがないとわかりました。

その時点で、メールにご自身が「本人はいたって元気です。在宅で訪問診療を受けることにしました。7月のお盆で上京の際にはぜひ寄って欲しい。その頃には順調に悪化していると思います」と、冗談を書くほどでした。

自宅での平穏な最期

7月14日ご自宅を訪ねると、ベッドの上でやや辛そうにしておられました。「昨日までは`起きてご住職をお迎えする。だから排尿の管も痛み止めもしない。戒名を直接お願いする。」と申しておりましたが、熱が出てだるいようです」と傍らの奥様の言葉です。声を出す元気はなくても、私の問いかけにはしっかり応答されました。「17日に新潟に戻ってから戒名をお送りします」と約束してお宅を辞しました。しかし翌15日に急変し、17日夕刻文字通り眠るように静

かに息を引き取られたとお知らせがありました。

1週間後、ご自宅での葬儀にお伺いしました。Nさんのお顔が微笑んでいるように見えたのは私だけではありませんでした。にこやかな遺影は、昨夏妙光寺の境内でプロのカメラマンが撮ったものでした。

まず臨終のことを

冒頭の日蓮聖人のお言葉は`人の死に遅い早いはなく誰にも必ず訪れるもの。だからいつその時が来ても良いように、心の準備だけはして置くように。という趣旨です。法話でお話することの多いお言葉ですが、私自身どれほど実感を込めて語っていたか、正直言って自信がありません。しかし出棺の際「`高齢になったら健康診断は受診しない。病はそのまま受け入れる。は故人の口癖でした。妙光寺様とご縁をいただいて夫婦で毎年夏に伺い、葬儀関連の先生方とも親しくさせていただき、死について色々学ばせていただきました。こうして穏やかな最期を迎えられたのは、そのおかげです」と奥様は参列者に向かいご挨拶してくださいました。

学生時代からスポーツマンで病氣知らず、くよくよしない明るい性格で世話好きという前向きな生き方も幸いしたでしょう。一方、大切なお嬢さんに突然先立たれるという辛い出来事にも出会われました。

人生の幸不幸は、誰にもあります。それでも有頂天になったり、落ち込んだりしない信念ある姿勢に学ばせていただきました。Nさん、ありがとうございました。

祝

『妙の光』復刊一〇〇号

みなさんと妙光寺のご縁を紡いで

1991年
『妙の光』
復刊第1号

1989年夏「安穩廟」ができ、翌年夏には第1回フェスティバル安穩を開催。その翌年3月、『妙の光』復刊第1号が発行されました。

B5版8ページ建てで、表紙はカタクリの花の写真（もちろん白黒）、次の見開きにご前様の随筆「我がこの土は安穩にして天人常に充滿せり」が載り、次に「信心」、それから「寺の動き」「あんのんのページ」「寺庭から」、最終ページが「行事案内」。基本の構成は、現在とほぼ同じです。



復刊第1号表紙



「寺庭から」第1号の第1回
タイトルは「動物王国」

妙 光寺教報『妙の光』は、先代小川英一住職が昭和20年代後半に創刊しました。ただし第1号と第2号は現存しておらず、正確な創刊年月日はわかりません。現存する第3号の発行月日は、終戦9年目の昭和29年（1954年）8月15日、同年8月28日には巻小学校で立正大学公開講座が行われています。講師は当時の立正大学学長・石橋湛山氏ら。石橋湛山氏はこの2年後に総理大臣になりました。昨年、湛山亭、と名付けられた妙光寺の茶室は、この時に氏が宿泊した部屋です。第4号は、昭和33年12月に発行。ここまでの『妙の光』は、ガリ版刷りでした。

第5号は、昭和47年（1972年）1月に発行。明るい黄色の紙で、B5版4ページの活版印刷です。そして翌年9月の第25号まで、毎月発行されました。第25号の表紙は「法華経化城喻品第七」によせる一文です。先代住職はその中で、幼いころに角田の砂浜を歩いた思い出を記しています。砂浜を素足で「よし、一直線に歩いてみよう」と目標を定めて歩き、百メートルほど進んで振り返ってみると、その足跡は一直線ではなかったという思い出です。「一直線に歩くことの難しさを痛感したことを思い出した。…人生の砂浜を一直線に歩むことはむずかしい」そしてお釈迦様や日蓮聖人は、しばしば足跡を振り返り一直線に歩いたとして「平凡人の私など明日への希望と足どりをより一層確実にするためには、もっと謙虚にふり返ることに努めよう」と結んでいます。その5ヶ月後、先代住職は遷化されました。

『妙の光』前史
先代住職による
創刊から25号



現存するもっとも古い「妙の光」第3号表紙



先代による第25号表紙
黄色い紙の活版印刷

昭和48年に先代住職が遷化して以来、途絶えていた『妙の光』を再刊いたしました。以前から催促されていたのですが、始めれば途中でやめられなくなるという不安が先立ち、腰を上げることができませんでした。しかし、県外在住の檀家の方々にも護持会費をご負担いただくようになり、また「安穩廟」お申し込みの方々の大半が県外ということで、より密接なコミュニケーションの必要性を感じ、頑張ってみることにしました。幸い石田誠太郎さんのご協力をいただき、年4回発行を目標にしています。気の長い応援をお願いします。

（ご前様の復刊1号、あとがきより）

皆さんの協力で迎えた一〇〇号
ありがとうございました

年 4回の発行を目標としたものの、最初の数年は年に3回しか発行できない年もあり復刊20号に至るまで6年間かかりました。幸い妙光寺は客殿の再建、境内の整備、本堂の建て替えなど常に新しい取り組みを重ね話題に事欠くことはありませんでした。一方で様々な事業と並行して『妙の光』を継続的に発行していくのは、大変なことだったのです。一〇〇号まで積み重ねた27年間には、たくさんの方の協力がありました。

interview

『妙の光』一〇〇号に寄せて
石田誠太郎さん（87歳）



Q 石田さんは、先代住職の教え子だそうですね？

石田 先代には旧制中学で公民を教わりました。私の妻は、新制中学で担任をして頂きました。そんなご縁があるので、先代が創刊する前に「今度寺報を出そうと思う。『妙の光』という名前だ」と聞いた記憶があります。今の題字も、先代がお書きになった文字ですね。

Q 復刊14号から「妙光寺史話」を連載されていますね。いつか、あの内容を『妙の光』で紹介したいと思っています。

石田 私が退職後、図書館の古文書講座で勉強したので、ご前様から「書いてみてほしい」と言われてお寺の古文書を調べて書いたのです。あの時古文書を整理した覚えがあるのですが、どうなっているかなあ。（石田さんがきれいに直してくださったものがお寺に保管されています。ページ参照）

Q 復刊一〇〇号を迎えた感想を聞かせてください。

石田 私は『妙の光』という題名は、妙光寺から皆さんに送る光という意味で先代

が名づけられたと思っています。お寺の情報を記録して配ることで、皆さんに光が届きます。一〇〇号続けてきた今は、その光が反射して妙光寺に戻っていると思います。最初のころは、ご前様一人で書いていた原稿も、多くの方が書くようになりました。「信心」で壇徒さんの紹介が続けてきたのも良かった。99号のインタビューで栖葉町から来られた渡辺さんが「自然豊かで心の落ち着く境内の環境が素晴らしい。そして開放的であることが妙光寺の魅力」と言っておられますが同感です。妙光寺境内は宗教的環境が整っています。そしていつ行っても開かれていて、誰でも歓迎される寺です。その魅力を『妙の光』が発信して、また皆が集まっている。一〇〇号を迎えたことは、本当に感慨深いですね。



聞いた人
編集部・新倉理恵子



本格的なカラー版は第73号から。この号から現在のA4版に。表紙の写真は写真家・天野尚さん提供「角田山の夕景」



県立高校教諭藤田久先生による連載
「寺の自然」第15号～第38号



「信心」第1号の
第1回「角田講中」
石田誠太郎さん筆



初のカラー版第67号表紙は、ご前様撮影「院庭と月」会心の1枚だったもので、この号のみカラー



石田誠太郎さんによる連載「妙光寺史話」
第14号～第25号

得度して五年半、 やりがいを感じる毎日です

法灯継承をひかえた次期住職・良恵上人は現在33歳。

現住職の娘たち4人の長女です。

「僧侶になるつもりは、まったくなかった」と語る彼女は、
今までどんな人生を歩んできたのか。今回は33年間の道のりについて聞きました。



——まず、生年月日を教えてください。

良恵 昭和59年（一九八四年）9月10日です。33歳になります。

——小さいときは、どんな子どもだったんですか？

良恵 お寺はいつも人が訪ねてくる環境ですし、私には年子の妹が3人います。ひとつ下に一人、ふたつ下には双子の妹です。毎日にぎやかに過ごしていて、小学校低学年の頃は、お転婆な子どもでした。

——男の子といっしょに遊ぶ感じですか？

良恵 というより男の子と殴り合いのけんかをして互角に闘っているという……おしゃべりで元気な子だったんです。

——学年があがるにつれおとなしくなってきた、と聞いていますが？

良恵 はい。一年から三年までの担任は

女の先生で、自由な雰囲気の方でした。

「今日は天気がいいから散歩に行きましょう」と言われて、みんなで散歩して私もののびのび過ごしていました。でも四年生からは体育会系の男の先生で「この先生、ちよつと苦手」と思っていました。

一学年1クラスで30人以下。男子とばかり遊んでいたのが、さすがに四年にもなるとそんなわけにはいきません。でも女子の中に上手に入っていけなくて、担任は苦手だし……もう自分の中に閉じこもりましたね。

——困りますよね。それで、どうしましたか？

良恵 そこで、読書に逃げたんです。というか、読書に目覚めました。大好きだったのは『冒険者たちガンバと15匹の仲間』（ガンバの冒険…ネズミのガンバが旅に出る物語）です。夢中になって読みました。それから『ナルニア国物語』やシャーロック・ホームズもよく読みました。

——中学校からは、市内西区の私立新潟清心女子中学校に行きましたね？

良恵 見学に行ったらとてももののびした雰囲気でした。カトリックの中高一貫校です。そして入学して二か月くらい経ったときに、親友ができました。よくお寺にも来てくれていた菊池崇子さんです。菊池さんは、現在安穩会員

で妙光寺茶道部員でもあります。心強いですね。

——清心中高校では、どんなことをしていたんですか？

良恵 中高一貫は1クラスで、6年間約40人が一緒に過ごしました。女子ばかりなので楽しかったですね。でも私はやはりおとなしい方で、美術部に入って放課後は美術室でおしゃべりして過ごしました。

——そして新潟大学に進学したわけですね。他の大学は受けないと言うのか、なり心配した、とお母さんからは聞いていますが……。

良恵 ええっ！そんな話になっているんですか！だって最初に「下に3人もいるんだから、国公立以外はダメだ」と言ったのは両親なんですよ。確かに親も大変だろうと思って、それなら家から通える新潟大学しかないのか……と思いました。人文学部に興味のある分野もありましたので。それに私は次の年度から国立大学のセンター試験科目が増えるという時にあったので、来年からは大変だとかかなり追い詰められた気持ちでした。

——「両親の話とはずいぶん違いますね。「子の心、親知らず」かな。

良恵 確かに勉強不足の自覚はありました。でも、すぐ下に妹たちがいるから浪

人させてくれとは言えないし、落ちたら自分が困ります。幸いセンター試験で運

が良く、社会科で鎌倉仏教がたくさん出題されたんです。合格圏内に入ったので、そこからの一ヶ月は二次試験に向けて本当に頑張りました。「国公立以外はダメだ」と言われたから、頑張ったんですよ。

——大学では、何を勉強したんですか？

良恵 人文学部情報文化過程でメディア論を学びました。卒論は「物語論」です。たとえば、「夏子の酒」というストーリーがあつて、その酒蔵の酒が売れるとか、そういうことがありますよね。物語が人間に及ぼす影響を分析しました。当時は出版社に勤めたいと思っていました。

——それで、就職は？

良恵 就職活動も頑張ったつもりですが、うまくいきませんでした。それで父の紹介で横浜の会計事務所に勤めることになりました。初めての一人暮らしで良い思い出もありますが、仕事は経理で私には向いておらず3年で辞めることにしました。大学まではなんとか自分の希望が実現したけれど就職は父に助けてもらうことになり、頑張ってみなければ仕事の内容にもなじめなくて辛くて辛くて、その頃は挫折感でいっぱいでした。

——再就職は、どんな会社でしたか？

良恵 失業手当をもらいながらハローワークで求人票を見て、五反田の個人経営の小さなオークション会社に勤めました。貴金属や骨董品を出品者から集めてカタログを作り、オークションを開いて落札してもらう。私の仕事は経理事務だったんですが、一つひとつの品物にストーリーがあるし知らない世界ものぞけるので、前の仕事よりは楽しかったです。

でも20日間休みなし連続勤務もあり、残業代も出ませんでした。そして2年経った時に、東日本大震災がありまして。二〇一一年三月十一日には私も五反田から上野まで歩いて帰りました。その時「このまま東京にはいたくないな」と思っただけです。

——そこで妙光寺の後継という話につながるんですね。

良恵 その頃「後継住職をどうするか」という話が本格的になってきて、「私でもできるのかな」とふと思いました。やると言ってしまうばやめることはできないので迷いましたが、今のままの自分ではいけないこともわかっていました。それで「妙光寺を継ぎたい」と父に言いました。会社を辞めて得度をしたのは二〇一二年春でした。

——大学に通いながら、鎌倉の圓久寺で修行したんですね？

良恵 立正大学の聴講生として勉強しながら、東京のアパートから鎌倉に通う生活を2年間送りました。もともと僧侶になる気がなかったのですが、正座も辛く、お経もわからないし、初めは大変でした。圓久寺の松脇上人は私の師僧ですが、当時も今も本当にお世話になっています。

——得度をしてから5年半経ちましたが、一番辛かったことは何ですか？

良恵 二〇一四年の春、千葉県清澄寺での「僧道林」という最初の修行生活です。総本山久遠寺での本格的な修行の前に行う四泊五日の修行ですが、とにかく辛かったです。集団生活で時間や行動もとにかく厳しい。朝早くから夜遅くまで、やることがたくさんあつて走らないと間に合わない。食事中も作法が決められていておしゃべりは厳禁。外との連絡はもちろん一切絶たれています。正座はできないしお経もうまく読めない。2日目に声が出なくなつて、それでもお経の練習が続いて、本当に辛くて早く新潟に帰りたいと思いました。その年の6月に、久遠寺の「信行道場」で1か月の修行をして、正式に僧侶になりました。「信行道場」の方が期間も長く、ここでも声が出なくなつたのですが、この時は辛くはなかったですね。帰りたいとも思いませんでした。

——この5年半の間に、僧侶をやめよう

と思ったことはありませんか？

良恵 ありません。それまでの仕事は続かなかつたけれど、僧侶の仕事をやめたと思うことは一度もありません。毎日見ている以上に忙しい。でも、いろいろな人に出会えるし、お経を読んで感謝していただけることに、本当にやりがいを感じます。

——でも僧侶は対人関係が大事ですよ。苦手な分野なのでは？

良恵 そうなんです。自分が人と接する立場に就くなんて、考えられませんでしたが、三女の綾はすつと相手に寄り添って会話ができます。天性のものだなあとあります。私は今も苦手意識があつて、ちゃんとやれているかどうかはわかりませんが、とにかく皆さんとお話するのは楽しいです。

——最後に、今後のことについて聞かせてください。

良恵 すべてにおいて責任をずっしりと感じています。一番心配なのは、「企画力」です。父のようにアイディアが湧いてくるわけではありませんから。でも皆さんに助けていただきながら、頑張っていきたいと思っています。

——いっしょに頑張りますよう。これからもうよろしく願います。

（聴いた人 編集部・新倉理恵子）



「蓮の花づくり」の体験コーナーは大盛況。



「斉藤文夫写真展・消えゆく故郷のお盆」



扇子に「花押」を求められるお坊さん！



「住職とトーク」では、お寺とお墓と生と死のあり方——「今を生きる智慧」が、本音で語り合われました。



山まで続く350基の灯籠に、亡き人への想いが…



美味しい食事と楽しい語らい「夜の交流会」

撮影:大滝主悦、田辺直輝、新倉順



本堂と川辺で、しめやかに執り行われた「送り盆法要」。デュオ「朋郎～TOMORO」さんの太鼓と篠笛が境内に響きました。



寺のうごき夏



万灯のあかり ～妙光寺の送り盆～

(第28回フェスティバル安穩)

8月26日(土)

今年の住職トークは「今を生きる智慧」と題して、妙光寺小川住職と志を同じくする僧侶の皆さんが、語り合いました。「お坊さん花押ラリー」は、扇子に書いていただく形式で大好評。おなじみの「蓮の花づくり」「妙光寺めぐり」(仏像解説)「ヨガコーナー」「前寺カフェ」も賑わいました。



日蓮宗のゆるキャラ「こぞうくん」も登場。



開門前、スタッフ100人の打ち合わせ。



子どもからお年寄りまで、みんなが楽しい大道芸コーナー。



お盆 施餓鬼法要

8月1日(火)

平日にもかかわらず、早朝からお墓参りのご家族連れで賑わいました。



岩屋七面様祭礼

8月19日(土)

法華經の守護神、七面大明神の祭礼です。土曜日のせいか、例年より多くの方がお詣りされました。



こんな人

良恵上人は、



次期住職・良恵上人を知る方々に、その人となりを教えていただきました。
現住職と似ているとも言われ、しかし全然違うとも言われるリョウケイさん。
いったいどんな人なのでしょう？

師僧・松脇行眞上人（鎌倉市圓久寺）



小学校1年生の時、四人姉妹の長女として、妹たちにビシビシ指示を出しながら、いつも読書をしていた姿が印象的でした。そんな女の子が、4年前（平成25年）圓久寺で得度式を行いました。それから2年間、大学に行きながら、毎週土日に圓久寺に通い、法式所作と読経や教え、僧侶としての心構えや面白さを学びました。

たくさんの人々の期待を背負い、重い義務が確かな責任と覚悟に変化して、けなげに修行していました。生来、頭の回転が速く、記憶力もよいので、何事もそつなくこなしていましたが、器用ゆえに反復練習や準備を怠りがちなのが気になります。でも、覚悟が使命へと昇華して、きっと乗り越えていくでしょうし、度胸もよく本番に強いので安心してます。

檀徒・石田初枝さん（角田浜）



よっちゃん、甘えん坊で、お刺身が大好きな女の子でした。そして、ちゃんと自己主張ができ、曲がったことが大嫌いな子でもありました。まさかお坊さんになるとは思いませんでした。年配の人のものだったお寺を、ご前様が若い人をひきつける寺にしてくれました。そんな親の姿を見て、決意してくれました。とても喜んでます。

中学高校の友人・菊池崇子さん（新潟市）



私から見た良恵さんは、自分の軸を持ち、自分の考えをハッキリ言える人です。高校では個性派揃いのクラスの中で、一歩引いた客観的な意見をしっかりと伝える良恵さんのことを先生方も頼りにしていたように思います。そんな良恵さんですが、高校の部活動紹介で行った劇で全校生徒の前で自作のボエムを披露するといふノリの良さも兼ね備えています。そんな魅力たっぷりの良恵さんの今後の活躍を楽しみにしています。

立正大学の友人

長瀬美咲上人（和歌山県報恩寺）



良恵上人が立正大学で僧階講座を受講されている時に会いました。

大学の仲間と、何度も食事を一緒に作って食べ

ました。ある時、良恵上人が牛蒡のさがきをしてくれました。良恵上人の手際に思わず見入っていたら、さがきのコツを教えてくださいました。以来、牛蒡のさがきをする度に良恵上人のはにかんだような優しい笑顔を思い出し、頬が綻びます。良恵上人は、側にいる人を優しく温かい気持ちにする冬の陽だまりのようなお上人です。

良恵の修行日記

最終回

たくさんさんの支えを忘れずに



先日、境内でサンコウチョウの鳴き声を耳にしました。『耳にした』と言つても、私は鳥に詳しくないため、一緒にいたお茶の先生に「良恵さん、ほら、サンコウチョウが鳴いているわ」と教えて頂かなければ気づかなかったのですけれど。その後住職も、お盆の棚経に伺った別のお宅で、野鳥の話になったようで「うちにサンコウチョウがいるらしいぞー」と初めて知った口ぶりだったのには、笑ってしまいました。普段当たり前だと思っているからこそ、気づけないことは沢山ありますね。

サンコウチョウは、鳴き声が「月・日・星」と聞こえることが名前の由来で、三光鳥と書くそうです。法華経では三光天子という、仏教の守護神が説かれています。「ホーホケキョ」と鳴く鶯共々、境内を護ってくれているのかもしれない。

修行日記も今回が最終回です。檀信徒の皆さんをはじめ、様々な物事に支えられて今があることを忘れない自分であるよう、これからも精進して参ります。

伯父・小川陽一さん

（中国文学研究者・仙台市）



弟である現住職から「良恵に漢文の特訓を」と依頼され、半年間授業をした。最終回に『聊

斎志異』の「刁姓」という短文を読んだ。人の生き様に目を向け、微妙な価値観を説いた話だった。人相見の刁は学識はないが、豊かな人間観察と咄嗟の機転で、客の心をつかむのにたけていた。良恵さんに感想を求めたら、「うーん」と考え込んでから出てきた解答はなかなかのものだった。将来この子は大物になるだろうな——終了判定は合格、単位は認定した。

妹・小川なつみさん（仙台市）



姉が「お坊さんになる」と言った時、私たち妹は「姉妹の中でそう決断をするとしたら良恵さんだろうな」と漠然と思っていたことに気がつきました。自分のことをペラペラとは話さない姉ですが（得度を決めた理由も聞いたことがありません）、4人姉妹の要であり、「いないと場がしまらないわね」と言われる存在です。家族の人生とともにあったお寺を、これからも引き継いでいくのはやっぱり、私たちの頼れるお姉ちゃんなのです。

35世日寿上人の著書など

妙光寺35世の日寿上人は、江戸中後期寛政時代に住職を務められました。学識豊かな方で、著書が妙光寺に残されています。

『祖書綱要冊略』 そしよこうようさんりやく

35世日寿上人筆(新潟市指定文化財)

江戸中期に肥後熊本の一妙院日導上人は日蓮聖人の教えを解説した『祖書綱要』23巻を著述され、これがあまりに難解でしかも膨大な量であるため、乞われて日寿上人が4年かけて7巻に要約され、こちらの方が教団内に広く普及した。いわば日蓮宗僧侶の教科書ともいえるものである。一字一句が丁寧に書かれ、緻密な論理と人柄が偲ばれる。



『臨時得意・年中行事』

35世日寿上人筆

日寿上人が住職在任中、妙光寺の年中行事を記録したもので細部に渡る内容は、以後の住職の助けとなった。幾度も読み返された跡があり、後世の上人による朱字の添え書きもある。痛んでいたものを、石田誠太郎さんに整理していただいた。(P5参照)

『曼荼羅本尊』

35世日寿上人筆

(寛政8年1796年)

歴代住職の曼荼羅本尊は多数残るが、その一部として紹介する。



国登録有形文化財3点



国登録
有形文化財
三重塔

江戸時代中期の建造と推測される。元は市内福井集落の他宗の寺にあったものを移築したと伝えられるが、理由は不明。平成18年に解体修理し、内部は元のように金泊塗に仕上げた。

国登録
有形文化財
山門

文化庁から届いた「国登録有形文化財」を証明するプレート。



文化11年(1814)角田浜の大工の作と記録される。

国登録
有形文化財
鐘楼

明治時代中期の建造と推測される。当初の梵鐘は昭和18年に戦争で供出され、昭和51年の再鋳以来、毎年除夜の鐘撞きで賑わう。



年会費口座引き落としの 手続きをされた方へ

10月27日に指定の口座から引き落としをさせて頂きます。つきましては前日までに口座へのご入金をよろしくお願いいたします。特にご希望が無ければ通帳への記載をもって受領書の発行は省略させて頂きます。

『法灯継承式』準備進む

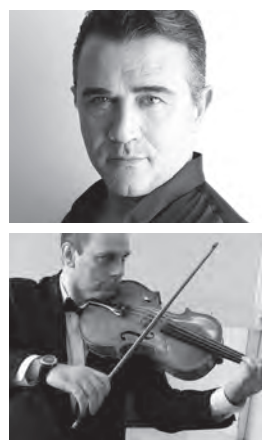
11月18日の法灯継承式は、おかげさまで本堂と『ホテル 泉慶』会場共に定員に達しました。ホテルの部屋割も完了して、現在送迎バスの運行計画を策定中です。バスお申込の方には、10月末までに直接乗車方法をお知らせします。11月に入っても連絡のない方は妙光寺までお問い合わせください。

当日は国内外でインターネット生中継が、下記のURLでご覧いただけます。

ブラウザで URL: <http://ustre.am/1pQ2L> を入力。
スマホでしたらUstreamのアプリをインストールし、「角田山妙光寺」で検索してもらっても見ることが出来ます。

天野尚写真展とコンサート

写真家としても知られた故天野尚さんの写真展とコンサートを開催します。8年前、妙光寺で天野さんの写真とコラボしたピアノコンサートを開き好評を得ました。天野さんは、妙光寺でまたやりたいと願いつつ、2年前61歳で他界されました。その遺志が、当時の関係者のご協力での度実現します。



テノール
ニコラ・ジヨルダン
ヴァイオリン
ディエゴ・ビッチョーニ



ソプラノ
栗原利佳
ピアノ
早川瑠璃



写真展イメージ

折しも日本造園組合連合会による「日本造園アカデミー会議」が9月17日妙光寺で開催され、小川住職も講演します。これに合わせて、ほとんど公開されていない天野さんの特写真『日本庭園の美』5点を、客殿大広間に展示します。お彼岸をはさみ、コンサートまでの2週間継続で展示することになりました。

現在内野駅—角田浜間を運行中のバス、シーサイドエクスプレスの利用率

を上げたいという思いもあります。9月の収益率が2割超でないと、運行が今年で終了になります。ぜひとも乗車にご協力ください。

『安穩廟』の現況

おかげさまで、全ての安穩廟の空気がなくなり、当面の受付は停止いたしました。引き続き多くのお問い合わせをいただきます。お問い合わせの際には、お話を聞きし、今後の検討とさせていただきます。

『法灯継承式』御祝に感謝いたします 継承式奉行委員会

この度の『法灯継承式』に際し、関係の皆様にご多大の不躰ながら御祝のお願いをさせていただきました。多数の方々から寄せいただき、心から感謝申し上げます。御祝は現在も受付中ですので、最終のご報告は改めていたしますが、取りあえずの御礼を申し上げます。

寺庭から

「旅路」小川なぎさ

お盆を終えて

8月1日には施餓鬼法要、新盆法要が行われました。本堂の施餓鬼壇に、毎年その年に亡くなった方の位牌を並べて供養します。あの世からこの世へお戻りになって「この世は暑いな!」なんて言って、「みんな元気かい?」と見守っていて下さるのでしょうか。

死は尊いもの——空っぽのお皿のように

お寺生活もずいぶんと長くなったので、千人以上の方々をお見送りしてきたわけです。思うに早いか遅いかの違いだけで、人は必ず霊山浄土への旅立ちが待っているものです。そういう事実は、私の人生観を大きく変えました。

この世は楽しいことばかりではないし、心配事は絶えないし、苦しいことも多い。面倒くさいことばかりです。なぜ私はここに存在しているのだろう? と不思議に思いますよ。けれどもどうやったって、死を迎えるその時まで生きていなければならないわけだし、本当にやっかいです。ならば好きなことだけして毎日おもしろおかしく暮らせばよいかというと、どうもそうでも無いような気がします。そんなこと出来ないですしね。

「料理人にとっての最高の褒め言葉は空っぽのお皿」と何かで読んだのですが、平凡で普通の生活者である私も、毎日生きているだけで価値があるのだと思いた

いし、最期は空っぽのお皿のように死んでいきたいとします。死は残された人たちにたくさんの贈り物を残して旅立つのだと、お寺での経験から身にしみて感じているし、尊いものだと思うからです。実家の母に「もうすぐ死ぬ歳だけど、どんな感じがするの?」と聞いたことがあります。「別に何にも感じないよ」と淡々としているので、笑いました。

これからもよろしくお願いします。

11月の「法灯継承式」が終われば、私も寺庭夫人ではなくなるそうです。けれどもお寺の仕事は続いていくので、お別れをいうのも変なものです。

お寺にてご縁をいただいたすべての方々に、心からの感謝の気持ちを捧げます。

また私と同じ年月をともに過ごした鎌田義明上人、初めての弟子としてよく御前様についてきてくれました。頭が下がります。ありがとう。

いつも遅くまで雑務をこなしている佐藤上人、たった一人で美しい境内を保ってくれる松本さん、明るくて根性のかたまり寺務の柿崎さん、ありがとう!

私は死ぬときまで生きつづけるつもりですが、先が見える年齢だからこそ自由がある。もうなんの心残りもないので、これからの旅路をカリカリせず、穏やかな気持ちで歩むつもりです。先のことは自分では選べないので、それもまた楽しみ! これからもよろしくお願いします。ではまた。